山梨医大紀要　第7巻，59—67（1990）

『カンタベリ物語』本文の中でチョーサーが初めて使用したラテン語とフランス語の研究（2）

保谷　一三

これはチョーサーが『カンタベリ物語』本文ではじめて借用したラテン語とフランス語の研究である。その総数418語は Mersand 書の第五章 Chaucer's Contribution to the English Vocabulary の表に拠ったが，実際に Appendix II で検討した結果410語であるので，そのように訂正したい。今回は次の36語を扱う。借用の年代は1386年（頃）と確定しており，これとフランス語における初出年とを比較し，借用の早さ，借用の文化的背景を論じる。その際大陸のフランス語と英国のフランス語とを区別し，なじみのフランス語からか海峡の彼方のフランス語からかによって借用の意味のちがいを明らかにする。

キーワード：チョーサー，ラテン語，フランス語，借用語

37. apertenaunt *a*[1)]　(OF[2)]) B.[3)] MK.[4)] 3505.[5)]

(…they conquered many regnes grete
In the orient, with many a fair citee,)
Apertenaunt un-to the majestee
(Of Rome, …)

（大意）（…彼等（＝夫婦）は東洋の大国を数多く征服した。それらは美しい都市を数多く有し，ローマの）支配に属していた。

Rothwell の *Anglo-Norman Dictionary*（以下 Rothwell と表す。）によると，この現在分詞形は形容詞の用法があり，法律用語として現代英語の appurtenant（属する）の古形である。

38. attemprely *adv* (OF) D. Sum. 2053.

(There is ful many an eye and many an ere.
Awaiting on a lord, and he noot where.)
For goddes love, drink more *attemprely*.

（大意）（節度ある家臣の一人が言った…）（実に多くの目と耳が君主を見守っております。ところと場所を問いません。）後生ですから，もっとお酒を控えて下さい。

Rothwell によると，Anglo-French に attemprément があり。副詞で，moderately, in moderation の意である。すると attemprely はその英語への直訳ということになる。

39. augrim-stones, *npl* (OF plus OE stones)　A. Mil. 3210.

(His almageste and bokes grete and smale,
His astrelabie, longinge for his art,)
His *augrim-stones* layen faire a-pert
(On shelves couched at his beddes heed :)

（大意）（トレミーの天文学書をはじめ大小の専門書，天文に必要な諸道具，）計算に使うそろばんが（寝台の枕許の棚の上に）かなりむき出しに並んでいた。

Rothwell によると，Anglo-French に augrime, orime があり，algorism ; number, figures の意である。

40. award *n* (AF) I. Pars. 480-5.

(…／Humilitee eek in werkes is in foure maneres :

山梨県中巨摩郡玉穂町山梨医科大学英語
（受付：1990年8月29）

…／) The ferthe is, to stonde gladly to the *award* of hise sovereyns, or him that is in hyer degree ;

（大意）（…謙譲はまた四通りに働きます。）四つ目は主君ないし上位にいる人の決定を進んで守ることです。

Rothwell によると award の原形は esgard で decision（決定）を意味する。Anglo-French では agard 'sight ; judgment, award'の形がある。法律用語である。形容詞に agardable があり，これも法律用語で 'awardable, to be awarded in judgment'の意である。Greimas によると OF agart は同じ意味をもち，1231年初出であるから，新しい言葉とはいえない。

41. blameful *a* (OF) B. Mel. 2315-20.

／The thridde is this, that he that is irous and wrooth, as seith Senec, ne may nat speke but *blameful* thynges, ／…

（大意）第三に，人は怒りっぽく腹立ち屋であった場合，セネカも言うように，人を呪う言葉しか言えません。

Skeat の Notes にはセネカの Latin text がついている。iratus semper plus putat posse facere, quam possit（怒った人は常に可能でないことも可能と考える。）これからみるとセネカの直訳ではなさそうである。

Rothwell によると AF に blasme, blame, blemme 'condemnation, censure'がある。

Dauzat によると OF では1080年の初出で，非常に古い。現代仏語では blâme である。

42. blasphemour *n* (OF) D. Sum. 2213-4.

('Madame,' quod he, '…　　)
I shal diffame him over-al ther I speke,
This false *blasphemour,* …

（大意）（「村長の奥さん」と彼（＝托鉢僧）が言った。「…）私はどこで話す時でも（私達を追い払った）あの男を呪います。（彼は）神を冒とくする悪者です。

lexis によると blasphème は1190年初出で，そのもとはキリスト教ラテン語である。Dauzat によると blasphémateur は1390年初出で，そのもとは教会ラテン語 blasphemator である。Rothwell によると AF にはない。すると，Chaucer が1386年頃であることから，これは教会ラテン語からの直接の造語ということになる。仏語では同義の profanateur も（教会ラテン語を経て）1566年の初出であるから，二語とも英語よりおくれる。

43. boidekin *n* (? AF Wyld ; OF Skeat)　A. RV. 3960.

(Ther dorste no wight clepen hir but 'dame.'
Was noon so hardy …
That with hir dorste rage or ones pleye,
But-if he wolde be slayn of Simkin)
With panade, or with knyf, or *boydekin.*

（大意）（だれも彼女（＝粉屋の良家の出の妻）を「奥様」と呼んだ。大胆に彼女にいちゃついたり，一度でも戯れる者はいなかった。そんなことをすれば夫のサイモンド奴に）パナードナイフやナイフや短剣で（殺されることを覚悟しなければならない。）

Skeat の Notes によると boydekin は特に used for piercing between the joints of armour で，刺すことが主目的である。従って PE では千枚通しの意味もある。Rothwell には記載がない。刺すという意味では，Greimas によると OF に boter ≪heurter, pusser≫があり，1080年初出。名詞 bot1160年初出，bote XIIIᵉS. 初出で，≪coup≫の意である。Dauzat によると OF bouter1080年初出。名詞 boutisse は1517年初出で≪pierre qui s'enfonce dans le mur≫の意。城壁に穴を開ける石である。この boter ないし bouter は古ドイツ語のうちガリアを支配したフランク族の言語 francique の動詞 bôtan≪frapper(突く)≫に由来する。一方-kin は *The American Heritage* 辞典によると Middle Dutch 由来の指小辞（diminutive）である。従って刺す専門の小型ナイフの意となる。同じ造語がドイツ語にもみられる。Moser のドイツ語辞典に Dolch (E. dagger)があり，これはインドヨーロッパ語 dhelg „stechen, Nadel"（刺す，針）に-ken を加えた形で，tolgken, dolgken, dollich（16世紀）を経て現代形 Dolch になった。従って Chaucer は francique, OF 系の bot-に-kin という Middle Dutch 系の指小辞をつけ

て造語した可能性がある。

44, boistously *adv* (AF) E. Cl. 791.

(Fully to han experience and lore
If that she were as stedfast as bifore,
He on a day in open audience)
Ful *boistously* hath seyd hir this sentence:

（大意）（彼女（＝妻）が前と変らず貞淑かどうか完全に知ろうと，ある日公けの場で彼（＝侯爵）は）乱暴に次のように言った。

Rothwell によると AF に boistousement *adv* があり，roughly, clumsily の意で，句として par boistousement prendre ou par vileinement manier（（鳥を）乱暴につかまえたり，意地悪く扱って（弱らせる））がある。

45. bole *n* (L) G. CY. 790

(There is also ful many another thing
That is unto our craft apertening…)
As *bole* armoniak, verdegrees, boras

（大意）（また私達の技術に属するものはほかにも数限りなくあります…）例えばアルメニア粘土，緑青，ホウ砂…

Skeat の Notes によると armoniak は Armeniak, i. e. Armenian とすべきだという。また bole は鉄分を含んだ白から黄色までのいろいろな色調をもつ粘土である。

Rothwell によると AF に boue, bo(u)we 'mud'がある。また *The American Heritage* 辞典によると，bole は medieval Latin（中世ラテン語）の bōlus 'clod of earth'に由来し，赤色粘土を表わす。

46. botel *n* (OF) H. Mcp. (Prol.) 14.

(Do him come forth, he knoweth his penaunce,
For he shal telle a tale, by my fey!)
Al-though it be nat worth a *botel* hay.

（大意）（彼（＝ロンドンの料理人）を出しなさい，彼は贖罪を知っています。彼はきっと話します。）話の価値はかけら程もなくてもです。

Greimas によると，中世オランダ語 bote≪touffe de lin≫（亜麻の束）に由来し，OF では bote が1316年初出。Dauzat によると diminutif の botel は XIVe—XVIIeS.の間に使われた。現代フランス語で botte de paille は麦藁束を表わす。Chaucer は OF の指小語を出現と同時に使ったことになる。なお現代英語では a bottle of hay（乾草の束）という形で残る。びんの意味の bottle も指小語であるが，語源は別で，OF bot（大びん）に由来する。

47. brasil *n* (?Sp.) B. Np. (epilogue) 4649.

(He loketh as a superhauk with his yen;
Him nedeth nat his colour for to dyen)
With *brasil*, ne with greyn of Portingale.

（大意）（彼（＝尼僧のお供）は目はハイタカのよう。赤ら顔を染めるには朱は要らない。）サパンの朱もポルトガルの朱も。

Skeat の Notes によると，brasil は東印度地方の木の名で，新大陸発見後（＝ラルース大百科によると，16世紀はじめ）南米にも同種の木がみつかったことから，その地は Brazil (brasil 木を産する国）となった。Rothwell によると AF にも brasil があり，brazil-wood の意である[6]。Greimas によると，OF bresil で1175年初出。現代フランス語 brésil であるが，語源は braise (fin XIIeS.初出）で，火のおきの意味，さらにそれは西ゲルマン語の*brassa（薪）に由来する。従って，火のおきの色→朱色という経過があったことになる。

48. bremble-flour *n* (OE bremble plus OF) B. Th. 1936.

(But he was chast and no lechour,)
And sweet as is the *bremble-flour*
(That bereth the rede hepe.)

（大意）（しかし彼（＝息子サートパス）は操を守り，女遊びしない。赤いキイチゴの実をならす）キイチゴの花のように美しい。

Rothwell によると，AF で flour, flur, flaur, fleur, fluir の異綴があり，flower（草花）と blossom（木の花）の両方を意味する。ここでのようにキイチゴの場

合 flour は現代英語でも flower という。Greimas によると OF flor である。Dauzat によると OF flor, flour は1080年の初出で，語源はラテン語 flos, floris である。

49. brest-plate *n* (OE plus OF) A. Kn. 2120.

(With him ther wenten knightes many oon;
Som wol ben armed in an habergeoun,)
In a *brest-plat* and in a light gipoun;

（大意）（彼（＝パラモン）にくっ着いて多くの騎士が同行した。ある者はくさりかたびらをつけ,）胸あてをつけ，また軽いはんてんを着ることを選ぶ。

The Riverside Chaucer の本文脚注によると文中の Som は A certain one の意であり，wol は willen の現在単数形ということになる。Som の複数は Somme で woln となる。

Rothwell によると AF に plate があり，thin sheet of metal の意である。

50. brybe *v* (OF) D. Fri. 1378.

(This Somnour, ever waiting on his pray,
Rood for to somne a widwe, an old ribybe,)
Feynyge a cause, for he wolde *brybe*.

（大意）（この（助司祭付きの）召喚吏（を務める少年）は，いつも（罰金の取れる）いけにえをさがしていたが，ある未亡人を召喚しに馬で出かけた。老いぼれの婆さんなのに,）理由を立てて彼女から金をせしめようとしたのである。

Rothwell によると AF で bribe という名詞に bit, piece という意味があり，bribour が vagrant（乞食）という意味で存在する。何故か動詞は存在しない。Greimas によると OF に bribe, brimbe が≪chose de peu de valeur≫の意味で存在する。これは時に屑パンを意味する。1335年の初出である。さらに briber *v*（X IVe S.初出）があり，これは≪mendier≫（物乞いする）を意味する。Chaucer は OF で動詞に現われると同時にこれを英語にとりいれたことになる。現代英語で bribe は贈賄するの意で，中世英語の物乞いする，ねだる，とは正反対の意味となっている。現代フランス語では動詞はなく，中世時代と同じ意味で bribe（屑）という名詞だけが残る。なお賄賂は英語で bribe，フランス語で pot-de-vin（口語）という。

51. bryberyes *npl* (OF) D. Fri. 1367.

Certeyn he knew of *bryberyes* mo
(Than possible is to telle in yeres two.)

（大意）確かに彼（＝召喚吏を務める少年）はゆすりの方法についてよく知っていた。（2年間では話し切れないくらいである。）

Skeat の Notes によると，これは 4-syllable word すなわち brybéry-es と読まなくてはいけない。また modes of robbery の意である。*The American Heritage* 辞典によると，OF briber 'beg'から bribery（物乞い）という名詞が出来ている。

52. bokelinge *v* (F) A. Kn. 2503.

(Lordes in paraments on hir courseres,
Knightes of retenue, and eek squyeres)
Nailinge the speres, and helmes *bokelinge*,

（大意）（諸王は陣羽織を着て軍馬にまたがり，家来の騎士，騎士見習いも）棒に槍先をつけ，かぶとに留め金をつけている。

Rothwell によると AF に bucle, bo(u)cle という名詞があり(1) boss on shield (2) buckle (of footwear)[7] 2つの意味をもつ。この場合，(2)の buckle の意味の延長で解釈できる。Greimas によると，OF bocle（X IIeS.初出）は(1) bosse de bouclier (2) anneau métallique の2つの意味をもち，これは AF とほぼ同一である。

53. calcening *n* (m. L.) G. CY. 771.

(…　　, and of the care and wo
That we hadde in our matires sublyming,)
And amalgaming and *calcening*
(Of quick-silver, …)

（大意）（…　そしてどんなに苦労して我々が物質を昇華させたり,）水銀に混ぜものをして加熱したり（…しているか）

Skeat の Notes によると水銀を加熱して酸化物にすることを calcine *v* という。Oxford の ME 辞典によ

るとcalcineはOF由来である。OFのもとはラテン語calx（石灰）である。石灰を焼くのは古来の技術であり，そこから石灰を焼くように焼く，という用法が出て来たとOEDのcalcineの項に説明がある。

54. calcinacioun *n* (L) G. CY. 804.

Our fourneys eek of *calcinacioun*,
(And of watres albificacioun)
（大意）また我々の炉は火力による粉末製造用（と液体煮沸による白色化用）となっています。
The Riverside Chaucer のexplanatory notesによると，4フィート×3フィートの四角い炉があったそうである。語源はcalcineと同じである。

55. carrik *n* (OF) D. Sum. (Prol.) 1688.

("And now hath Sathanas," seith he, "a tayl)
Brodder than of a *carrik* is the sayl.
（大意）（「さて悪魔は」と彼（＝夢の中で托鉢僧に地獄を案内してくれた天使）が言った。「尻尾）の巾は大型帆船のそれよりも大きいのですぞ。」
Rothwellによると AFにcarrak, car(r)akeがあり，carrack，すなわち大型船を意味する。Greimas, Dauzatには記載がない。しかしOEDはOF carraqueに由来するとしている。

56. castelled (OE plus OF) I. Pars 445-50.

(Pryde of the table appereth eek ful ofte; …／
Also in excesse of diverse metes and drinkes; and namely, swiche manere bake metes and dish-metes, …,) and peynted and *castelled* with papir…

（大意）（食事の自慢もさらに本当に多い…／また度外れに様々な肉や飲み物が出る。すなわち，様々な肉のパイ，シチュー，…これらが）色つけされたり，紙の胸壁で飾られたりして出てくる。
Rothwellでは名詞chastel, castelは出ているが，動詞形はない。Greimasによると castrum 'camp'のdiminutifがcastellumである。これはDauzatによると poste fortifié d'un camp（野営地のうち特に強化した場所）を言うが，のち語義拡大によってfortresse（城）も意味するようになった。名詞形は1080年初出である。Greimasによると動詞形chasteleは1160年初出で，Munir d'un château, fortifier（城を備える，強化する）の意である。

57. catapuce *n* (F) B. NP. 4155.

(A day or two ye shul have digestives
Of wormes, er ye take your laxatives,
Of lavriol, …)
Of *catapuce*, or…
（大意）（（おんどりの妻が言った，「恐怖感に襲われているのなら…）…一日か二日虫の消化剤をのみなさい。そのあと緩下剤をのみなさい。タカトウダイ草とか…）風鳥木とか，また…
Rothwell, Greimas, Dauzatにないが，OEDによるとmed. L cataputiaからOFに入った。

58. cered *pp* (F) G. CY. 808.

Cered pokets, sal peter, vitriole;
（大意）蠟で防水した小袋，硝酸カリウム，鉄や銅の硫化物（が私達のところにある。）
SkeatのNotesによると，*cered* (Lat. ceratus) means waxed…useful for many of the alchemist's purposes. Dauzatは名詞cireが1080年初出，動詞cirerがfin XII^{e}S.（12世紀末）初出としている。Rothwellによると，AFには名詞形のみがあり，cire, ce(i)re, scire, sereの異形がある。

59. cerial *a* (OF) A. Kn. 2290.

A coroune of a grene ook *cerial*
(Up-on hir heed was set ful fair and mete.)

（大意）（アテネ王テセウスの城で南ヨーロッパの常緑の樫の葉の冠が（彼女（＝王妃の年若い妹エミリー）の頭に置かれた。全く美しく見事だった。）
SkeatのNotesによると，L. cerrus（トルコ樫）の形容詞形cerreusに由来する。Rothwell, Greimas, Dauzatには記載がないが，*Shogakukan Robert*（ロ

ベール）仏和大辞典によると，couronne de chêne という句がある。訳は「（ローマの英雄などに授けられた）ナラの葉で編まれた冠」となっているが，「ナラ」より「樫」の方が日本人にはわかり易い。

60. ceriously *adv* (F) B. ML. 185.

(Thise marchants han him told of dame Custance,)
So gret noblesse in ernest, *ceriously*,

（大意）（これらの商人達は彼（＝シリアのスルタンまたはサルタン）に（ローマ皇帝の娘）コンスタンス嬢について本当に高貴なお嬢様であると，詳しく（話した。）

Skeat の Notes によると，ceriously はラテン語の series の形容詞をもとにした副詞である。*The Riverside Chaucer* の explanatory notes によると，low Latin（俗ラテン語）の形容詞 seriose に由来する。一つの意味は「まじめに」，もう一つの意味はラテン語の series を意識して「縷々（るる）」である。OED によると，series 関係の副詞としては seriously のほか seriatim, seriatly がある。

61. champartye *n* (F) A. Kn. 1949.

(Thus may ye seen that wisdom ne richesse,
Beautee ne sleighte, strengthe, ne hardinesse)
Ne may with Venus holde *champartie*.

（大意）（かくておわかりの如く知恵も富も，美も利巧さも，力も強さも）（愛欲の女神）ビーナスと互角に太刀打ちすることはできないのです。

Rothwell によると AF の champartie は法律用語で，champerty（利益分配を前提とした訴訟援助）を意味する[8]。Greimas, Dauzat では OF champart（1283年初出）は Droit du seigneur de prélever une part sur les récoltes des champs（農地の収穫の一部を徴収する領主の権利）を意味する。しかしここではそうした専門的な意味はなく，単純な champ parti＝rivalry, equality（互角）の意味である。

62. chaunteth *v* A. *Mil.* 3367.

('What! Alison! herestow nat Absolon)
That *chaunteth* thus under our boures wal?'

（大意）（「おい！アリスン！お前は（教区牧師の助手の）アプサロンの声がきこえないかい？）おれたちの寝室の壁の下であのように歌っているじゃないか。」

chanter *v* は sing mass という時の sing に相当するフランス語である。Rothwell によると AF に chanter *v* があり，Greimas によると，OF には chanter（X^{e}S. 初出）があって，これはラテン語 cantare に由来する。この語は現代日本では名詞形のシャンソンで知られる。

63. chastness *n* OF G. SN. 88.

(It (＝The name of Cecilie) is to seye in English 'hevenes lilie,'
For pure *chastnesse* of virginitee

（大意）（それ（＝シセリアという名前）は英語で「天国の百合」を意味します。処女の純粋な貞淑さを表わします。

Rothwell によると AF には形容詞 chaste[9]の名詞形として chastesce, chasteté, -etie, chasteé がある。Greimas によると OF で chaste *a* は1138年初出，教会ラテン語 castus *a* 'pur, chaste'に由来する。また名詞形は形容詞より早く，chastee（1119年初出），-ece（1130年初出）でいずれも'chasteté'を意味する。個人の属性の論議より，概念の論議が先行した形跡がある。OED によると chastity は *c*1305年初出で1872年の用例がある。しかし chastnesse は *c*1386から1718年までの用例で終っている。

64. chilindre *n* (L 由来) B. Sh. 1396.

(And lat us dyne as sone as that ye may;)
For by my *chilindre* it is prime of day.

（大意）（ベルギーのフランダースへの商用旅行の無事安全をサンドニ大聖堂で祈ってもらうために招かれた若い僧ジャンが商人の妻に言った，）僕のポケット太陽時計で9時です。（正餐の用意をおねがいします。）

Skeat によると chilindre は portable sundial である。prime は canonical hours の一つを表わす[10]。また *The Riverside Chaucer* の explanatory notes によると，Dinner is usually taken some time between

pryme (9 A. M.) and noon.である。またここは僧が食い意地を張っていることを表わす（この日で宿泊3日目。）と言っている。また僧が一日何回食事をするかについて妻の言葉がヒントを与えている[11]。*lexis* は lat. cylindrus を，Oxford の ME 辞典は F cylindre をそれぞれ語源として示している。

65. chincherie *n* (OF) B. Mel. 2790-5.

For right as men blamen an avaricious man by-cause of his scarsetee and *chincherye,*／in the same wyse is he to blame that spendeth over largely.

（大意）なぜなら貪欲な人がけちん坊で，出し惜しみするので非難されるのと丁度同じ様に／余りに大金を浪費する人も非難されねばならないからです。

Skeat の Notes によると形容詞 chinche 'parsimonious, miserly'は chiche の nasalized form（鼻音 n を加えた形）である。Rothwell によると AF に chiche に由来する chinche，名詞形 chinchesse，chincheté 'meanness, avarice'がある。Greimas によれば chiche の初出1175年，chicheté, chincheté は XIIIeS.初出である。

66. colera *n* (L) B. NP. 4118.

(Certes this dreem, which ye han met to-night,
Cometh of the grete superfluitee)
Of youre rede *colera*, pardee,

（大意）（めんどりの妻がおんどりの夫に言った，）（「確かな話，そのような夢を今夜みられたのは体液が過剰になったからです。）特に赤い胆汁です。」

Skeat によると red colera は caused by too much bile and blood (sometimes called red humour)である。*The Riverside Chaucer* によると，the cock（おんどり）は生まれつき hot and dry だから当然らしい。OED によれば cholera は four humours (sanguis, cholera, melancolia, phlegma)の一つである。

Dauzat によれば choléra は'bile'の意味で1546年初出である。colera の仏語化は Chaucer より160年後れている。

67. chose *n* (F) D. WB. 447.

For if I wolde selle my *bele chose,*
(I coude walke as fresh as is a rose;
But I wol kepe it for youre owene tooth.)

（大意）なぜなら私のいいもの（＝女の性的好意）を愛人達にあげてしまう気になれば，(私はバラの花のように匂いやかに歩き回れるでしょう。でもそのいいものはあなただけにとっておいてあげるつもりです（と私は三番目の夫ウィルキンに言った。))

Rothwell によると，AF に chose, chouse, chiose, cose 'thing, property, commodity'がある。Greimas によれば OF に chose, cose があり，842年初出。ラテン語 causa に由来する。

68. cinamone *n* (F) A. Mil. 3699.

My faire brid, my swete *cinamome,*
(, (Awaketh, lemman myn, and speketh to me!)

（大意）私の美しい花嫁，私の可愛いいシナモン，（お起き，私の恋人，私に口をきいてちょうだい.！）（とアリスンの窓下で教区牧師の助手アブソロンがアリスンに向けて歌う。）

綴りは Mersand の使用した Skeat の text とは異なる。n → m である。Dauzat によると L. cinnamomun から cinname が1213年に作られ，cinnamome が1256年に作られた。これは肉桂の木と言われ，OED によれば東印度産で，内皮が香味料（スパイス）として利用される。

69. cink *numeral* (OF) C. Pard. 653.

('By Goddess precious herte, and…)
Seven is my chaunce, and thyn is *cink* and treye;

（大意）（「神かけて…）サイコロは7に私は賭けます。あなたは8に。

chaunce は二個のサイコロを転がす時の賭け数を言う。*The Riverside Chaucer* によると，7に賭ける時11でも勝つが，12では敗ける，また敗けでない数が出れば何度でも投げられるというようなルールがある。

Rothwell によると，AF にも cinc, cink, cing; sinc, singe, synck 'five'がある。Dauzat によれば cinq は cinc という綴りで1080年初出，ラテン語 quinque の異

化（dissimilation）である俗ラテン語 cīnque に由来する。

70. citrinacioun *n*（中世ラテン語）G. CY. 816

(And eek of our materes encorporing,)
And of our silver *citrinacioun*,
（大意）(そしてさらに我々の行う諸々の物質の合成）また銀の黄色化

Rothwell によると AF に citrin という形容詞があり，lemon yellow を意味する。また citre は縦長の西洋南瓜を意味する。Greimas によると，OF の名詞 citrin はレモンの意で X II^{e}S.初出。また OF の「西洋南瓜」は AF と同じ citre。現代仏語で citrouille。『小学館ロベール仏和大辞典』によると「果皮の色の（レモンとの）類似から」である。黄色地に緑の縦縞がある。しかし citrinacioun のもととなる動詞 citroner は OF，AF にはなさそうである。中世ラテン語のままを AF 形にして使用したのかも知れない。

71. citryn *a* (OF) A. Kn. 2167.

His nose was heigh, his eyen bright *citryn*,
(His lippes rounde, his colour was sangwyn,)
（大意）彼（＝アーサイトを支援するエメトリアス印度王）の鼻は高く，目は淡黄色，（唇は丸く，肌は赤い。）

Rothwell によると AF　citrin は形容詞で「lemon yellow の」を意味する。Greimas によれば OF citrin は「レモンの実」を意味する。従ってここでは明らかに AF の単語である。

72. clergial *a* (?OF) G. CY. 752.

(Whan we been ther as we shul exercyse
Our elvish craft, we semen wonder wise,)
Our termes been so *clergial* and so queynte.
（大意）（私達が世俗修道僧（の助手として）その家にいて妖術を行う時，私達は驚くほど賢いみたいで，）使う言葉も学者風で，従って複雑を極めています。

Rothwell によると clerigel *a* が AF にあり，'learned'の意味である。もとの名詞は clergie で「牧師職；学問；（俗人に読めない）ラテン語」の意味がある。Greimas によると OF で clergil *a* があり，1190年の初出で，≪clérical, écclésiastique≫の意である。

（続く）

文　献

1）*a* は adjective を示す。以下品詞の英語名の略語がここに来る。
2）OF は Old French を示す。以下語源となる言語の英語名の略語がここに来る。
3）B. Skeat ed. *The Works of Geoffrey Chaucer* の volume IV (TEXT)の目次に表示された物語の集団分類記号で，アルファベット順になっている。
4）MK. Skeat の TEXT 目次に出る The　Monkes Tale の略語。
5）3505　The Monkes Tale の行番号。何行目であるかを示す。
6）Rothwell ed.の *Anglo-Norman Dictionary* によると，De la bale de…Safroun, Greynz, Brasyl, …（…サフラン，コチニールカイガラムシ，朱木…の入った袋について）*Oak Bk* ii 8 という文がある。なお文献の full title は Fascicle 1 の冒頭の List of Works Quoted によると *Oak Book of Southampton* である。
7）*Anglo-Norman Dictionary* によると les boucles de ses soulers sunt a orfreis（彼の靴の留め金は金の装飾が施されている）*Boeve* 329 という文がある。
8）*Anglo-Norman Dictionary* によると par sa champartie aveit empris de meyntenir une assise de novele disseysine（訴訟援助を理由に新たに獲得した物件の所有権を要求する訴訟を起そうと企てていた）*Records of the Trial of Walter Langeton, Bishop of Coventry and Lichfield* 1307—12年，という文がある。
9）*Anglo-Norman Dictionary* によると Chaste esteit de quer et de corp（身も心も純潔だった。）*La Vie d'Édouard le Confesseur* 342 という文がある。
10）canonical hours は特にカトリック教会の聖書朗唱時刻のきまりと関係がある。matins and lauds

（午前2時），prime（午前6時：日の出），tierce（午前9時），sext（正午；日の出から6時間後），nones（午後3時；日の出から9時間後），vespers（午後6時；日没），complin（寝る前の朗唱時刻）。しかしnonesは繰り上ってsextの位置に移り，noonとなり，primeは繰り下ってtierceの位置に来ている。その結果primeは午前9時である。

11) Ne be ye nat ashamed that daun John／Shal fasting al this day alenge goon?／What, lat us heere a messe and go we dyne.（はずかしくありませんか，あなた，ジャンさんに今日一日断食させるわけにはいかないでしょう？　さあ，ミサをきいて正餐にしましょう。）1411–3.

Abstract

A study of Latin and French loan words which Chaucer first used in *The Canterbury Tales* except the General Prologue (2)

Katsuzo HOYA

This is the second installment of a study of Latin and French loan words which Chaucer first used in *The Canterbury Tales* except the General Prologue. The total was 418 according to Ch. V, Chaucer's Contribution to the English Vocabulary in Mersand's *Chaucer's Romance Vocabulary*. But actually counting the words listed in Appendix II, I found that it was 410. This time I treat the next 36 words, No. 37 to No. 72. The date of the first borrowing is ascertained to be about 1386. The present study compares the date with that of the first recorded appearance in French, and elucidates the rapidity, and the cultural background, of borrowing. Special emphasis is placed on distinguishing the two sorts of French, Continental French and Anglo-French (or Anglo-Norman), thus making clear the nuance of borrowing. (To be continued)

Department of Foreign Languages (English)